

～登った! 漕いだ! 走った! アメリカ大陸5万キロ～

前号で深澤裕さんが探検家・角幡唯介の『極夜行』や『新・冒険論』という真面目で哲学的な探検本を紹介されていたので、ここではチョット弥次喜多道中の探検譚を紹介したい。一見行き当たりばったり風ではあるが、これもまたそれなりに貴重な“探検”スタイルの一つではあるまいか。

さて、近頃は愚妻から「身の回りのことが未だ自分で出来る間に、アナタのガラクタ（山道具）や本は全て捨てて逝って頂戴ヨッ!」としつこく言い渡されているので、本もできるだけ増やさないようにしているのだが、天国ジジイとかいうトレッキング会社の社長の腰巻評論についつい釣られて買ってしまった。

その腰巻に曰く「心のマグマが疼きだす! 遊びの心理は“自由奔放”、この本の主人公たちは40年余り前の青年たちです。いま爺さんです。でも、変わらずのスタンスで、まだまだ同じように山遊びを楽しんでいます。己の発想、自力実践、好きなことは年代を越え普遍です。共感を呼び込む、そんな極め付きの面白さです」。

この種の本は、大抵はだらだらと書かれた物見遊山の物珍しさだけが取り柄の寄せ集めのイイコロ加減な本が多いので、この本も、マ、その口であろうかと余り期待もせず読み始めたら、オット・ドッコイ、グイグイと引き込まれて一気に読んでしまった。

今から半世紀も前のこと、20代前半の若者3人がオンボロ車を転がせて北は北米のシアトルから南はチリのパタゴニア迄パンアメリカン・ハイウェイを無銭旅行同然で渡り歩きながら、途中の各地で山登りをしたり、また、アマゾン源流へカヌー・イカダ探検に出掛けたりした1年間の放浪記である。

今の時代の“探検”は、日程にしる装備にしる予めその計画の詳細までキチンと決められた一分の狂いも無い計画書どおりになされるらしいが、この本のそれは自由気まま、出たところ勝負、明日は明日の風が吹く式の全くの行き当たりばったり、しかも3人組という奇妙なパーティー編成で（偶数人数でパーティー内の人事関係バランスを取るのが普通であるが・・・）よくも1年間もの長きにわたり放浪の旅ができたものと感心させられるが、やはりそれは若さのなせる業であろうか。ゴチャゴチャしたトラブルなどは全く気にせず気に向くままに天真爛漫、酒あり、女<sup>お婆</sup>あり、遊びありと全く羨ましい限り。

一見チャランポラン風ではあるが、アメリカ北部のマウント・レニアのバリエーションルートやマウント・フッド北壁、ヨセミテのクライミング、南米のチンボラソ、ワスカラン、それにアンデス核心部の最難関峰トーレ・デ・クリスタル南壁初登攀、タウリラフ南壁初登攀など押さえるべき山はちゃんと押さえているのがニクイ。ワスカランもスキー初滑降だそう。特に、タウリラフ（5830m）南壁初登攀は、BCからの往復2週間、張ったフィックス・ロープ300m、核心部のザイルピッチ31ピッチ、墜落してザイルに宙吊りになったり、途中の壁にぶら下がりシュラフ無しでの極寒のビバーク2晩などという風雪と雪崩に打たれての壮絶な登攀だったらしいが、それをアッケラカンとした弥次喜多風筆致で綴っているところがこれまたニクイ。日記風の叙述場面では、3人がそれぞれ同じ場面を書いているので重複が煩瑣であったり、文章に凸凹があったりして読みにくい部分もあるが、これだけの“偉業”を成し遂げたかつての若者（今は爺さん）と、彼らが活躍できた往時の良き世相に拍手を贈りたい。

白山書房 2018年6月刊、1600円

